

SPECIAL NEWS

ア マゾンの電子書籍サービス「Kindle」日本参入も間

近といわれ、文科省が電子教科書の導入を検討しているなか、話題となっている本がある。東大の酒井邦嘉教授が著した『脳を創る読書』。なぜ「紙の本」が人にとって必要なのか。紙の本と電子書籍がそれぞれ人間の脳に与える影響を、はじめて科学的見地から検証した画期的な一冊だ。

本書の企画の発端は、実業之日本社の村山秀夫社長の、「もう一度紙の本の良さを見直したい」という思いと、「教科書まで電子化して本当にいいのだろうか」という素朴な疑問だった。社長と同じ問題意識を持っていたという総務次長の後藤正子さんはこう語る。

「単に紙の本の良さを伝えるのではなく、電子書籍のメリット・デメリットも客観的に論じた本を読みたいと思ったのですが、そのような本は見つかりませんでした。であれば当社で作ろうと。酒井先生は、ご自身でも紙の本と電子書籍を使い分けていて、科学者でありながら言語教育にも関わっていらっしゃいます。このテーマにピッタリだと思いました」

同じように、電子書籍化の加速に危機感を持っていた酒井氏も、「一度、きちんと論じてみたいテーマだった」と即快諾。昨年、12月に発売された本はじわじわとマスコミヤ出版業界で取り上げられ始めた。

本書でまず丁寧に検証されているのは、読書そのものが脳に与える影響だ。例えば、映像よりも音声、音声よりも活字のほうが、脳の想像力や思考力が鍛えられる。

電子書籍は想像力と思考力を奪う？
「紙の本」の必要性を
はじめて科学的に検証した
『脳を創る読書』（酒井邦嘉／著）が話題に！！



受け取る情報が少ないほど、脳は想像して補うからだ。文の構造を見抜き、行間を読み、その先を予想する。想像力と思考力は、記憶力にもつながっていく。一方で、脳は複雑さも好む。複雑な文法の言語を理解し自在に操ることができるのはそのためだ。活字の書体や記号、改行やレイアウトも脳にとっては重要な要素となる。このように前半では、読書量が多ければ多いほど言語能力が鍛えられる理由が、明快に論じられている。

後半では、紙の本と電子書籍の違いに踏み込んでいく。パソコンの画面では気づかない間違いが、プリントアウトした紙の上で見つかるのは、脳がもつ「注意」のメカニズムに起因するという。また、本の厚みや重さ、紙の質や手触り、

デザインといった本の個性も脳は敏感に感じ取る。そういう意味で紙の本は非常に高スペックで、複雑さを好む高次機能の脳

『脳を創る読書』

酒井邦嘉 実業之日本社 1260円

読書は脳にどう働きかけるのか、電子書籍と紙の本の違いは何なのか、図やイラストをまじえながら分かりやすく解説。読書を通じて人間の無限の能力を働かせ、いかに言葉の世界を豊かにしているかがよくわかる。想像力、思考力、記憶力、そして感性を奪われないために、電子化社会でどう本と向きあうべきかを考えさせられる。

の働きを活性化させるのだ。書き込んだり印をつけたりする手がかかりも脳の記憶に大切な要素だが、電子書籍や電子教科書は今のところそういった読み方はできない。むしろ電子書籍は、電子化社会に適応するためのメリットはあるが、便利で無駄がないぶん人の思考力や想像力を奪って「わかった気になる」という問題点もある。

編集担当の佐藤克己さんによると、「酒井先生に、この本を誰に読んで10代で完成するため、それまでどう鍛えるかが重要になるのです」

もちろん大人の脳も使い方によって進退を繰り返すため、特に本好きは、紙の本と電子書籍をどう使い分けるべきか、真剣に考えたほうがいいだろう。ダ・ヴィンチ電子ナビの「それゆけ電子書籍」コーナーでは、酒井氏のロングインタビューも掲載中。ぜひ一読いただきたい。

東京大学大学院総合文化研究科教授
酒井邦嘉氏

さかい・くによし ●1964年東京都生まれ。東京大学理学部物理学卒業。同大学院理学系研究科博士課程修了。同大医学部第一生理学教室助手、ハーバード大学医学部リサーチフェロー、マサチューセッツ工科大学客員研究員を経て、97年より東京大学大学院総合文化研究科助教授、准教授。2012年より同教授。02年毎日出版文化賞、05年塚原伸晃記念賞受賞。専門は、言語脳科学および脳機能イメージング。著書に『言語の脳科学』、『科学者という仕事』、『脳の言語地図』、『脳でわかるサイエンス① ことばの冒険』など。

